



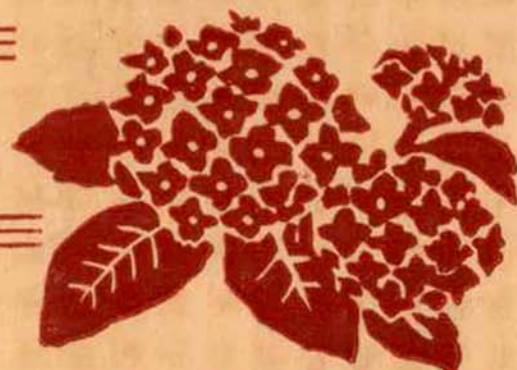
角川文庫

— 637 —

暗 夜 行 路

前 篇

志 賀 直 哉



角 川 書 店



角川文庫

暗夜行路 前篇
全二冊



昭和二十八年七月二十五日
昭和三十年十月二十日
初版發行
九版發行

定價七拾圓

著作者 志賀直哉

發行者 角川源義

印刷者 長久保慶一

東京都新宿區市谷加賀町一ノ一二

發行所

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
株式會社 角川書店

電話九段(33)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

路 行 夜 暗

前 篇

哉 直 賀 志



角 川 文 庫

637

武者小路實篤兄に捧ぐ

序 詞 (主人公の追憶)

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程経つて、不意に祖父が私の前に現はれて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ、猫脊の何となく見すばらしい老人だつた。私は何といふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。釣上つた口元、それを圍んだ深い皺、變に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた、私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立上つて門内へ駆け込んだ。其時、

「オイ、お前は謙作かネ」と老人が背後から云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振返つた私は心では用心してゐたが、首はいつか音なく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて来て、私の頭へ手をやり、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお榮といふ二十三四の女が居た。

私の周囲の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに、自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼兒から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風に、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした豫感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に／＼冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故私はその事をさう悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪慳だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかかはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあつた梯子から誰にも氣づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる……
間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だつた。

「あのネ、其處にぢつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ、其處に音なしにして居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乗りの儘少し後じさつた。

「ああつー」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしのこと。お母さんの云ふ事を

よくきくのネ」

私はちつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。

私は一人茶の間で寝ころんで居た。其處に父が歸つて來た。父は黙つて、袂から菓子の紙包を出し、茶簞のの上に置いて出て行つた。私は寢た儘、じろくそれを見てゐた。

父が又入つて來た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞ひ込んで、出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母さん、お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。

「何か。よう、何か」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上つて、

「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は黙つて私の頬をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシヤリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いやー」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャ／＼してかなはなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎に角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變へられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帶へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に摑まつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を摑み、ぐん／＼戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌齒の間から、羊羹が細い棒になつて入つて来るのを感じながら、私は度膽を抜かれて、泣く事も出来なかつた。

亢奮から、母は急に泣出した。少時して私も烈しく泣出した。

根岸の家では總てが自墮落だつた。祖父は朝起きると楊子をくはへて錢湯へ出かけた。そして歸ると其寢間着姿で朝餉の膳に向つた。

來る客も變つた色々な種類の人間が來た。殊に花合戦をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小説家（？）それから山上さんと皆が云つてゐる五十餘の一寸未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黒革の手さげ鞆を持つて來た。それには、きまつて澤山な小錢と、一揃ひの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たさうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大學で歴史を教へて居た或る年寄つた教授の細君で、此女の甥が嘗てお榮と同棲して居た、その緣故で、良人に隠れて好きな遊び事の爲めに來たのだと云ふことである。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉卷のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお榮から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪辯ばかり使ふ若い寄席藝人がよく仲間へ入りに來た。

お榮は勝負には入らなかつたが、祖父の勝敗には多分實際上の氣持から、よく焦慮して口出しをして居た。さう云ふ時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑はせるのは其寄席藝人であつた。

後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうと、よく考へた。月々困らぬだけの金は父から來てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の賣り買ひをしたり、がらくた道具屋の競賣に家を貸して席料を取つたりした。まうけづく以上、祖父の趣味

のやうにも思へた。

お榮は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。さう云ふ時、お榮は妙に浮きくとする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行歌を小聲で唄つたりした。そして、酔ふと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、ちつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいままに、何かしら氣の遠くなるやうな快感を感じた。

私は祖父を仕舞ひまで好きになれなかつた。寧ろ嫌ひになつた。然しお榮は段々に好きになつて行つた。

根岸の家へ移つて半年餘り經つた或る日曜日か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤兒とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるやうな心持で、祖父が茶の間へ引きかへしてから、一人其處に残つてゐた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現はして喜んだに違ひない。そして首肯いた。

「さあ、来い」父は坐つた儘、兩手を出して、かまへた。

私は飛び起き様に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突返される度に遮二無二ぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身體全體で嬉しがつた。そして、をどり上り、全身の力で立向かつた。然し父は中々私の爲めに負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」かういつて父は力を入れて突返した。力一ぱいにぶつかつて行つた所には、ずみを食つて、私は仰向け様に引つくりかへつた。一寸息が止まる位背中を打つた。私は少しむきになつた。而して起きかへると、尙勢込んで立向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑聲で云つた。

「未だだ」と私は云つた。

「よし。それなら降参と云ふまでやるか」

「降参するものか」

間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。

「これでもか」父はおさへて居る手で私の身體をゆす振つた。私は黙つて居た。

「よし、それならかうしてやる」父は私の帶を解いて、私の兩の手を後手に縛つて了つた。そしてその餘つた端で兩方の足首を縛合せて了つた。私は動けなくなつた。

「降参と云つたら解いてやる」

私は全く親みを失つた冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帯びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。

私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅廣い肩が見るからに憎々しかつた。其内、それを見つめてゐた視線の焦點がぼやけて來ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。

父は驚いて振り向いた。

「何だ、泣かなくてもいい。解いて下さいと云へばいいぢやないか。馬鹿な奴だ」
解かれても、未だ私は、なき止める事が出来なかつた。

「そんな事で泣く奴があるか。もうよし／＼。彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」かう云つて父は其處にころがつて居る私を立たせた。

私は餘りに明らかな惡意を持つた事が羞かしくなつた。然し何處かに未だ父を信じない氣持が私には残つて居た。

祖父と女中とが入つて來た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、説明した。祖父は誰よりも殊更に聲高く笑ひ、そして私の頭を平手で軽く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

第一

一

時任謙作ときたふけんさくの阪口さかぐちに對する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中うちにも清々すがくしい氣持になつた。そして彼は其讀み終つた雜誌を枕元へ置くのも穢けがらはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ抛なつて、電氣を消した。三時近かつた。

彼は矢張り興奮して居た。頭も身體も芯は疲れてゐながら中々眠る事が出来なかつた。彼は頭を轉換さす爲めに何か氣樂な讀物を見ながら睡ねむくなるのを待たうと考へた。が、さう云ふ本は大概お榮えいの部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥ちよつとしたが、拘泥するだけ變だとも思ひ返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。襖の外で、

「一寸本を貰ちよつとひに來ました」と聲をかけて、「塚原ト傳つかはらぼくでんは戸棚ですか」と云つた。

お榮は枕元の電燈をつけた。

「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」

「眠ねむれなくなつたんで、見ながら眠ねむるんです」

謙作は茶簞笥の上から小さい講談本を持つて、「明日みやうにち」と云つて其の部屋を出た。

「御機嫌よう」かういつて、お榮は謙作が襖を締めるのを待つて電燈を消した。

謙作は其氣樂な講談本を読みながら、朝露のやうな濕り氣を持った雀の快活な啼聲を戶外に聴いた。

翌日はどんより曇つた靜かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお榮の聲で眼を覺ました。

「龍岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に會ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかつた問題であつた。

「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」かう云つて出て行くのを、

「阪口だけ斷つて下さい」と彼は云つた。

「何うして？」お榮は驚いたやうに振り返り、兩手を襖に掛けた儘、立つて居た。

「ぢやあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云ふのは、或主人公が其家うちにある十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事實だと思つた。そして其事實も彼には不愉快だつたが、それをする主人公の氣持が如何にも不眞面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出來る場合は赦せるが、阪口の場合は書く動機、態度、總てが謙作には如何にも不眞面目に映つた。尙其上にそれに出て來る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に對する主人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が餘りに子供らしく無邪氣な爲めに誰からも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにある友達がそれを切り^{しき}に心で同情して居る。主人公は尙皮肉にそれを見抜きながら、多少苛々^{いらくく}もして、其女を泣かす事などが書いてあつた。

謙作は其女中を實際嫌ひではなかつた。如何にも無邪氣で人がよささうな點を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小説では何も知らぬ友達が心密かに其女を戀してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に、動^{ぐみ}ともすると起つて来る嘲笑を抑へ、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人^{ひと}の心を隅から隅まで見抜いたやうな、しかも、それが如何にも得意らしい主人公の氣持が謙作をむか／＼させた。

然しそれにしても何故今日訪ねて來たか。其雜誌が出てからもう一週間になる。其間^{あいだ}何か自分から烈しい抗議の手紙でも來さうに思ひながら、中々來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それともつと性の悪い偽惡者根性から、太々^{ふてく}しい面構へを自分に見せるつもりで來たのかも知れないと謙作は疑つた。若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいいと考へた。

謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顔を洗ひながらこんな考へで興奮した。

茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方から二人のしてゐる話し聲が聴こえて來た。二人は如何にも吞氣な調子で話して居た。謙作は何だか自分だけが鯨張^{しやちこば}つて居るやうな變な氣がした。

皆が平氣で居る中に一人怒つてゐる自分が狐につままれたやうに馬鹿氣でも見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晚はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると、龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。
「もう起きる頃だつたのだ」

阪口はお榮が出て置いて其日の新聞を見ながら何氣ない顔をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな氣持で來たのではない事を知つた。例のだらいなさからずる／＼と龍岡に誘はれて來たに違ひなかつた。それでも彼は、

「君達は何處で會つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小説を見たかい？」と龍岡は特に「此奴」と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。

「いやな小説だ。それもいいが、中に出て來る氣の利かない友達に僕は僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすつかり腹を立てて、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」

阪口は新聞から眼を放さず、にや／＼笑つて居た。龍岡は一人云ひ續けた。

「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」

阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顔もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行為の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや／＼してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。さう云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕